

## 兵庫

### 1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、平成25年を除き、平年収量を下回っている。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

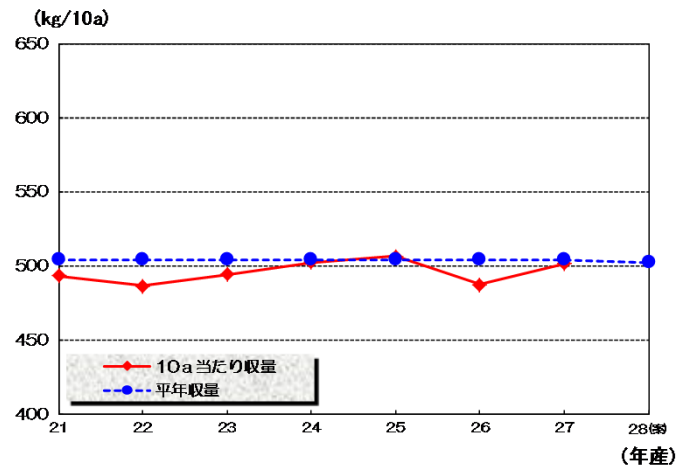
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	×	—	×	98
22	×	—	×	96
23	×	—	×	98
24	×	○	—	100
25	○	×	×	100
26	×	—	×	97
27	—	—	—	99

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み  
 ×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(兵庫は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約4割を占め、「キヌヒカリ」、「ヒノヒカリ」の3ヒカリで7割を占めているものの、それぞれ減少傾向にあり、その代わりに酒造好適米として、収量水準の低い「山田錦」が増加傾向にある。(図2及び表3)

図1 近年の10a当たり収量と平年収量水準



兵庫	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a当たり収量	493	486	494	502	506	487	501	495
平年収量	504	504	504	504	504	504	504	502
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
兵庫	504	495	△9	499	498

図2 品種別作付面積割合の動向

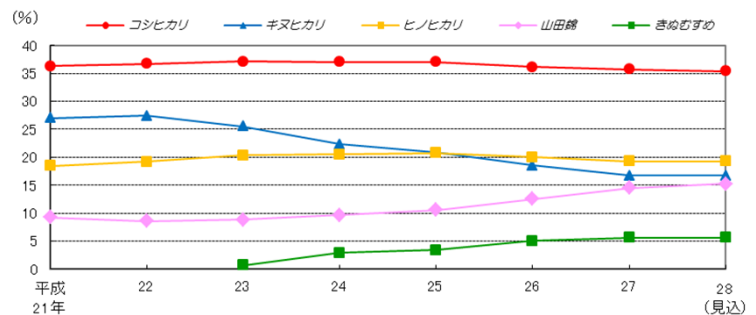


表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	483	37.1	37.0	37.0	36.1	35.7	35.4
キヌヒカリ	500	25.5	22.3	20.8	18.5	16.7	16.7
ヒノヒカリ	516	20.3	20.5	20.7	20.0	19.3	19.3
山田錦	481	8.7	9.6	10.5	12.5	14.5	15.2
きぬむすめ	538	0.7	2.9	3.4	5.0	5.6	5.6
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.8	0.1	0.3	△0.2	△0.1

資料：水稻作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 地帯別作付面積割合等の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の低い県南が微増傾向にある。

(表4)

また、比較的収量水準の高い県北地帯(主に「コシヒカリ」)では収量水準の低い無農薬・減農薬米のコウノトリを育む農法による「コウノトリ米」(平成15年より開始)も増加傾向にある。(表5)

表4 地帯別作付面積割合の動向

地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
県南	495	73.9	74.1	74.2	74.4	74.8	74.8
県北	500	15.3	15.3	15.3	15.3	15.4	15.4
淡路	497	10.7	10.6	10.5	10.3	9.8	9.8
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)		△ 0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0

資料: 水稲作況調査結果等  
注: 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

表5 県北地帯のコウノトリ米の作付面積の動向

特別栽培米	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コウノトリ米	477	0.7	0.7	0.8	0.9	1.2	1.3

注: 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 栽培技術面の動向

栽培技術面の動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴い1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。(図3及び4)

図3 1㎡当たり株数の推移

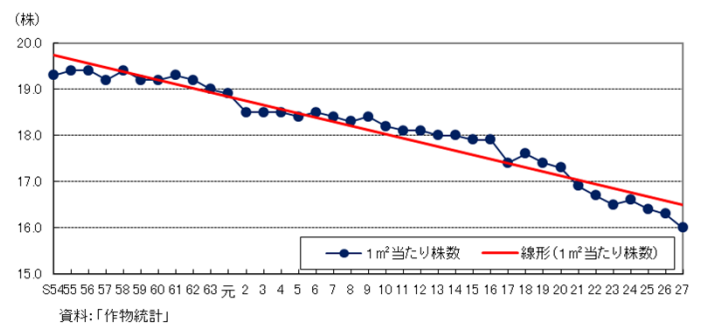
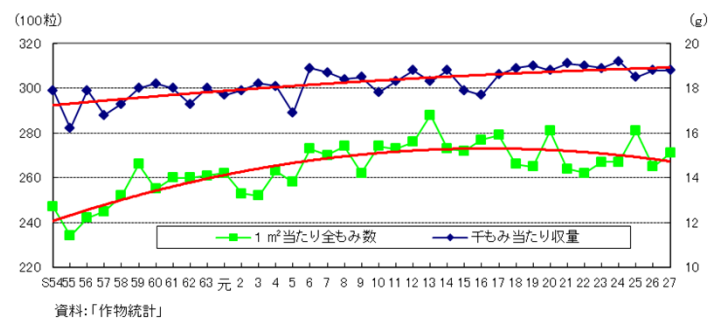


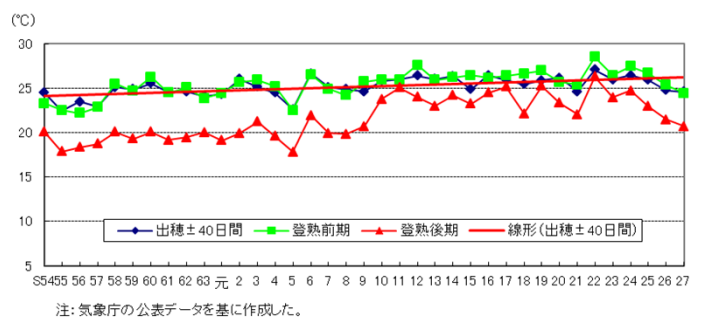
図4 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 5 収量水準の動向

- ①近年の10a当たり収量の動向をみると、平成25年を除き、平年収量を下回っていること、
  - ②主力品種の「コシヒカリ」等が減少し、収量水準の低い「山田錦」が増加傾向にあること、
  - ③収量水準の低い県南地帯が増加傾向にあることに加え、収量水準の高い県北地帯でも収量水準の低い無農薬・減農薬米の「コウノトリ米」が増加傾向にあること、
  - ④省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあること、
- 等から、収量水準は下降傾向にある。

図5 平均気温(出穂前～登熟期)の推移



注: 気象庁の公表データを基に作成した。

# 高 知

## 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成21年を除き、全て平年収量を下回っている。（図1、表1及び2）

表1 最近の作柄（平成21年産以降）

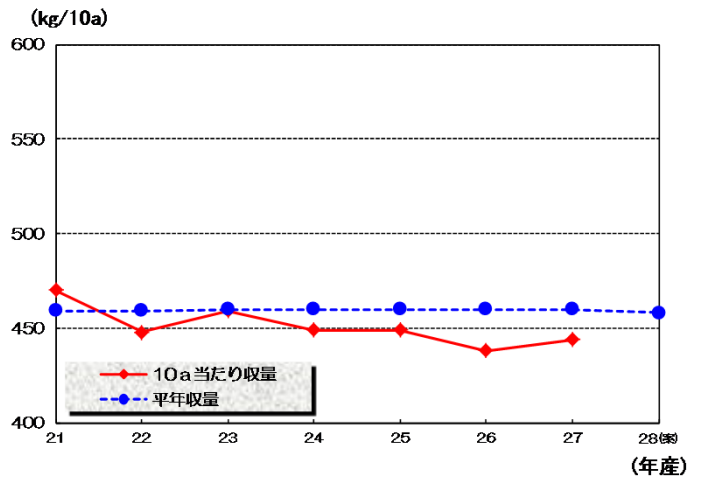
年次		全 も み 数	登 熟	被 害	（作 況 終 指 ） 数
21	早 期	○	—	○	103
	普通期	—	○	○	102
22	早 期	××	◎	×	98
	普通期	×	◎	×	97
23	早 期	×	—	×	97
	普通期	○	○	○	104
24	早 期	××	○	×	98
	普通期	×	×	×	97
25	早 期	××	○	×	98
	普通期	○	××	×	96
26	早 期	×	○	×	98
	普通期	××	×	××	91
27	早 期	—	×	×	96
	普通期	◎	××	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（高知は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、早期は「コシヒカリ」、普通期は「ヒノヒカリ」を中心とした品種構成で、近年、収量水準の高い「コシヒカリ」が減少傾向にある中、高温登熟に優れた「にこまる」が増加している。（図2及び表3）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



高 知	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
10a 当たり収量	470	448	459	449	449	438	444	
平年収量	458	458	460	460	460	460	460	458
平年収量の前年差	0	0	1	0	0	0	0	-2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	（参 考）	
				5中3 平均	5か年 平均
高 知	460	450	△ 10	447	448

図2 品種別作付面積割合の動向

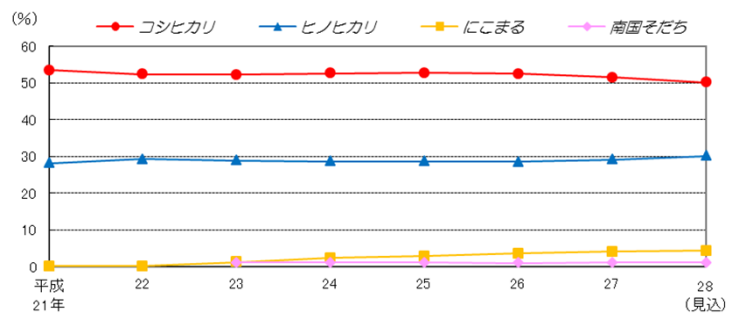


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	469	52.2	52.6	52.7	52.5	51.5	50.1
ヒノヒカリ	431	28.9	28.6	28.7	28.5	29.1	30.1
にこまる	456	1.3	2.4	2.9	3.6	4.1	4.3
黄金錦	341	2.4	2.1	1.7	1.6	1.5	1.4
南国そだち	489	1.1	1.1	1.1	1.0	1.1	1.1
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.5	0.4	0.1	△ 0.4	△ 0.4

資料：水稲作況調査結果等  
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 地帯別作付面積の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準に与える大きな影響はない。(表4)

表4 地帯別作付面積割合の動向

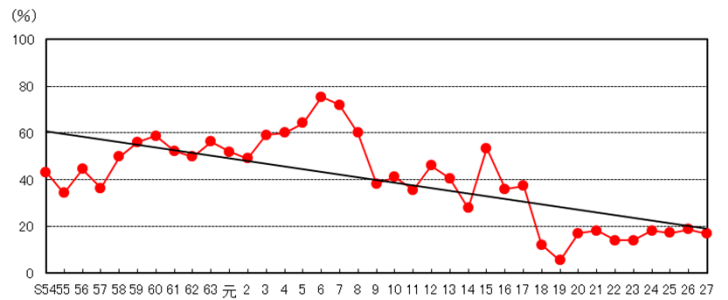
地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
中東部	471	59.5	59.4	58.5	58.9	60.0	60.1
西部	418	40.5	40.6	41.5	41.1	40.0	39.9
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)		△0.1	△0.5	0.2	0.6	0.1	

資料：水稲作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図3及び4)

図3 1等米比率の推移

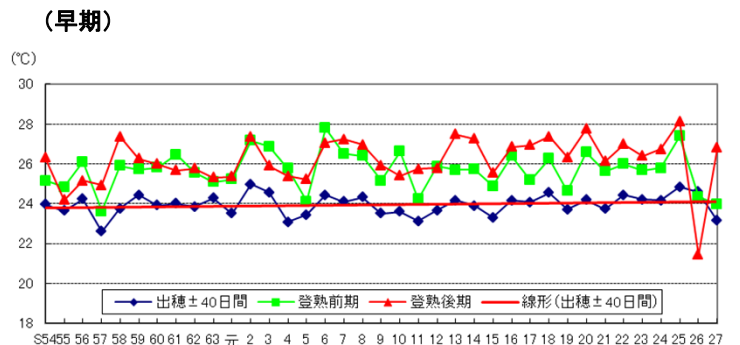


資料：農林水産省調べ

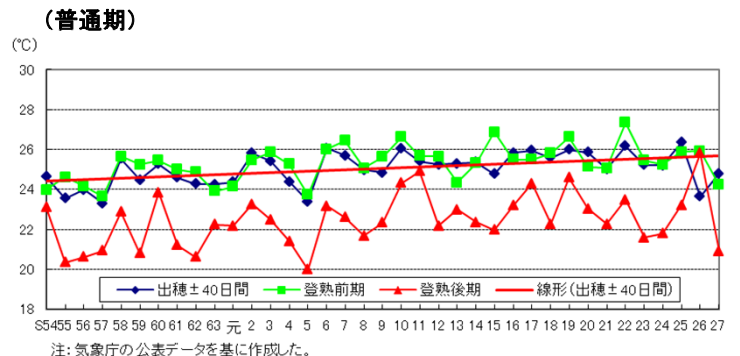
### 5 収量水準の動向

①近年の10a当たり収量の動向をみると、平成21年を除き、全て平年収量を下回っていること、  
 ②主力品種の「コシヒカリ」等が減少し、「コシヒカリ」に比べ、収量水準の低い「にこまる」が増加傾向にあること、  
 等から収量水準は下降傾向にある。

図4 平均気温(出穂前～登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 福岡

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

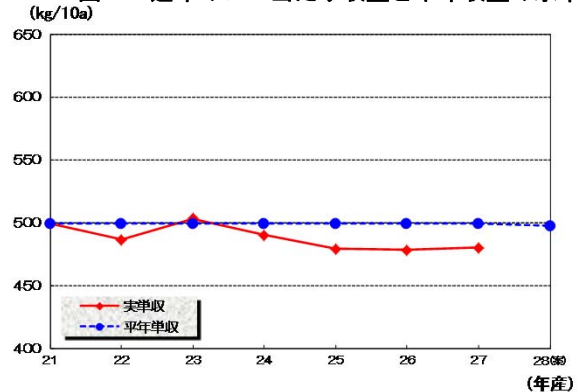
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	×	○	—	100
22	×	—	×	97
23	—	—	—	101
24	—	—	×	98
25	—	×	×	96
26	×	—	×	96
27	×	—	×	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（福岡は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種で高品質・高収量の「実りつくし」への作付誘導が進められているものの、比較的収量水準の高い「ヒノヒカリ」等が減少し、比較的収量水準の低い「元気つくし」等の作付面積割合が増加する傾向にある。(図2)

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



福岡	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
実単収	499	486	503	490	479	478	480	
平年単収	499	499	499	499	499	499	499	497
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2
作況指数	100	97	101	98	96	96	96	

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
福岡	499	487	△12	483	486

図2 品種別作付面積割合の動向

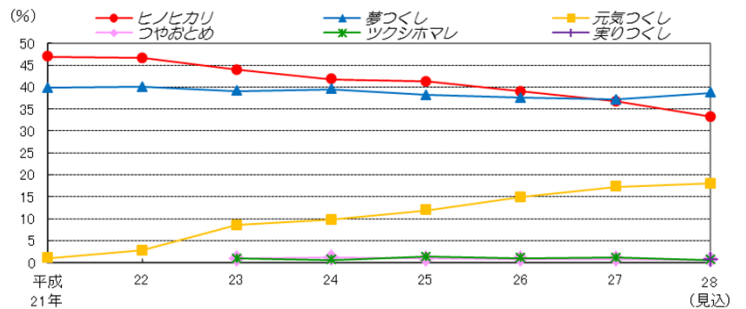


表3 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ヒノヒカリ	517	43.9	41.8	41.2	39.0	36.7	33.2
夢つくし	477	39.1	39.5	38.2	37.5	37.1	38.7
ヒヨクモチ	545	2.8	2.6	3.2	3.1	3.4	2.8
元気つくし	483	8.5	9.8	11.9	14.9	17.3	18.0
つくしろまん	480	0.9	0.8	0.7	0.7	0.8	0.6
あきさやか	608	0.9	0.5				
つやおとめ	542	0.9	1.1	0.9	0.8	0.8	0.6
コシヒカリ	481	1.1	1.1	1.1	1.0	1.0	1.1
ニシホマレ	562	0.2	0.6				
山田錦	475	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	1.0
ツクシホマレ	552	0.9	0.6	1.3	1.0	1.1	0.6
実りつくし	597						0.6
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)		△ 1.0	△ 0.5	△ 1.0	△ 0.6	△ 1.2	

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業者等の情報から推計した。

### 3 作柄表示地帯別作付面積の動向

作柄表示地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の高い筑後地帯において平成28年度の作付面積割合が前年度に比べて増加すると見込まれるものの、近年の動向をみると減少傾向にある。

(表4)

表4 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)					
		24	25	26	27	28 (見込)
福岡	469	16.3	16.4	16.4	16.6	16.4
北東部	474	36.8	37.0	37.4	37.5	35.6
筑後	504	46.9	46.6	46.2	45.9	48.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			△ 0.3	△ 0.6	△ 0.1	0.7

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

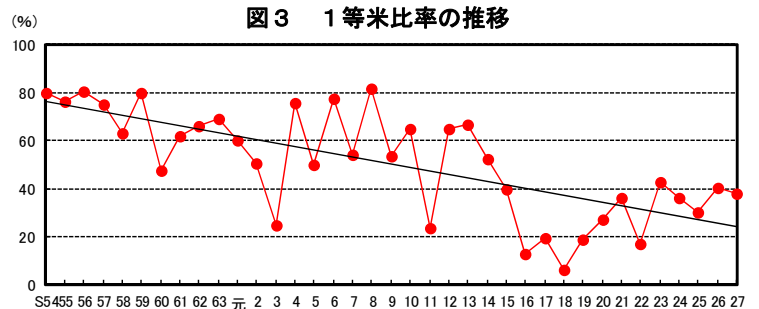
2 平成23年産から24年産にかけて面積階層の移動があったため、24年産からのデータで検証した。

3 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図3)

図3 1等米比率の推移

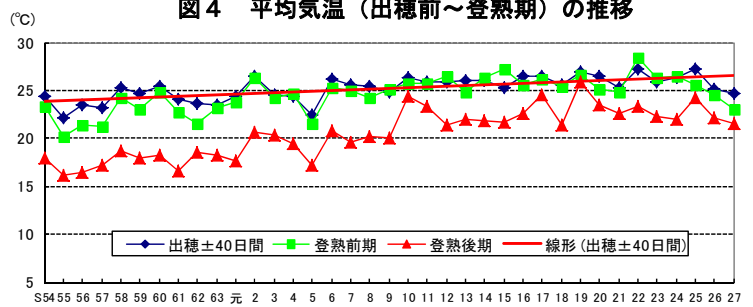


資料：農林水産省調べ

### 5 収量水準の動向

- ①近年の10a当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、
  - ②品種別作付面積割合をみると、比較的収量水準の高い「ヒノヒカリ」等の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い「元気つくし」等の作付面積割合が増加していること、
- 等から、収量水準は下降傾向にある。

図4 平均気温(出穂前~登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 熊本

### 1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

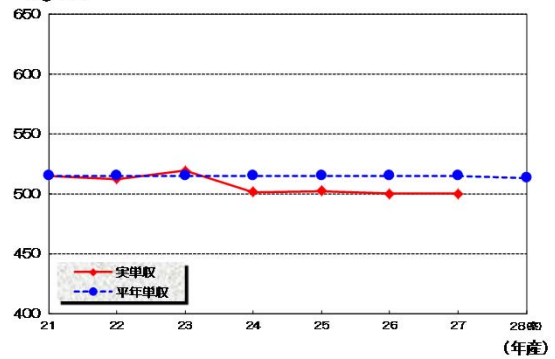
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	××	◎	○	100
22	×	○	—	99
23	—	○	—	101
24	×	—	×	97
25	—	×	×	97
26	×	—	×	97
27	—	×	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み  
 ×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（熊本は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準 (kg/10a)



熊本	21	22	23	24	25	26	27	28(見)
実単収	515	512	519	501	502	500	500	
平年単収	515	515	515	515	515	515	515	513
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2
作況指数	100	99	101	97	97	97	97	

資料：「作物統計」

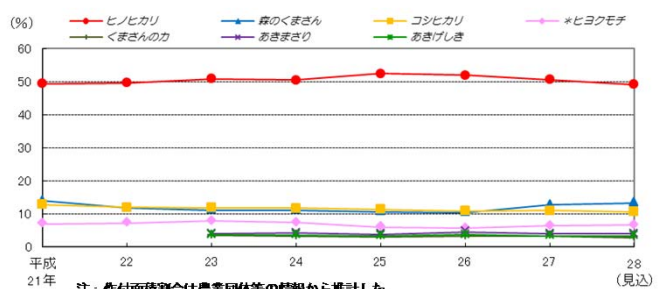
表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
熊本	515	506	△9	501	504

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ヒノヒカリ」の作付割合がおおむね5割を占めている。その他の品種は多少の推移があるものの、大きな変動はみられない。(図2)

図2 品種別作付面積の動向



注：作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化の推進を図るため、疎植栽培及び緩効性肥料（基肥一発肥料）の使用農家が増加傾向にある（平成18年32%→平成28年（見込み）55%）。（図3）

また、疎植栽培の増加による1㎡当たり株数の減少に伴い、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。（図4及び5）

図3 緩効性肥料の使用割合の動向

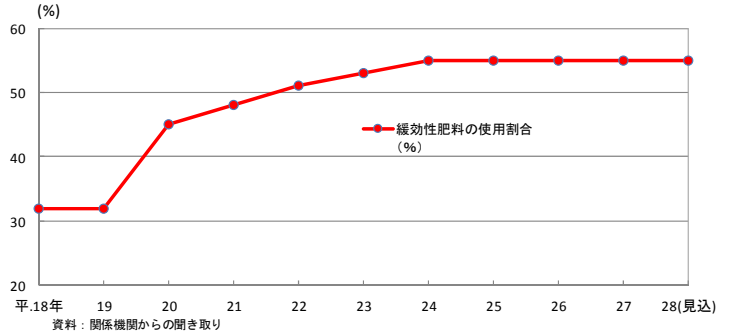


図4 1㎡当たり株数の推移

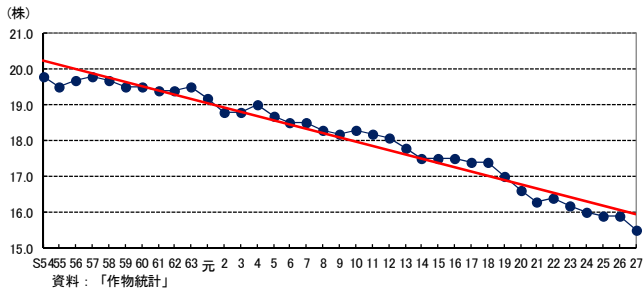
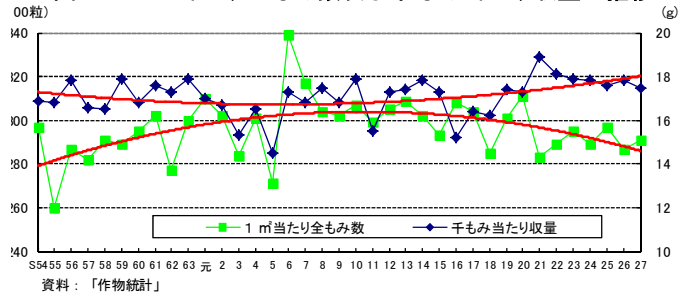


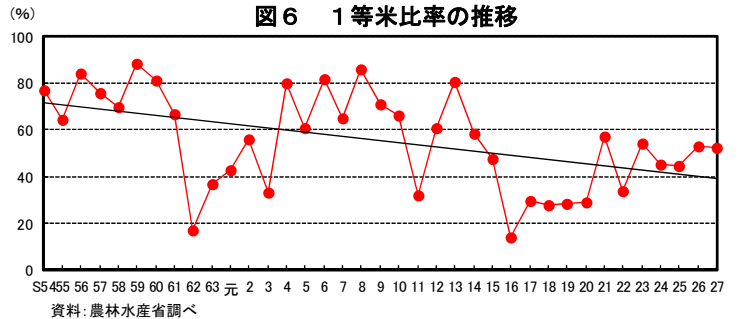
図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。（図6）

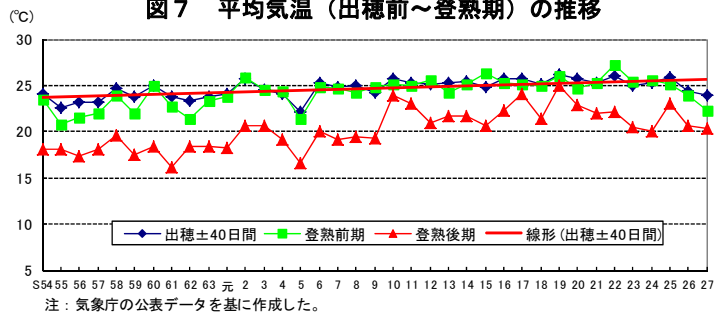
図6 1等米比率の推移



### 5 収量水準の動向

- ①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、
  - ②省力化・低コスト化に伴い、疎植栽培が増加傾向にあり、収量水準の低下していること、
- 等から、収量水準は下降傾向にある。

図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移





# 大分

## 1 近年の10a当たり収量の動向

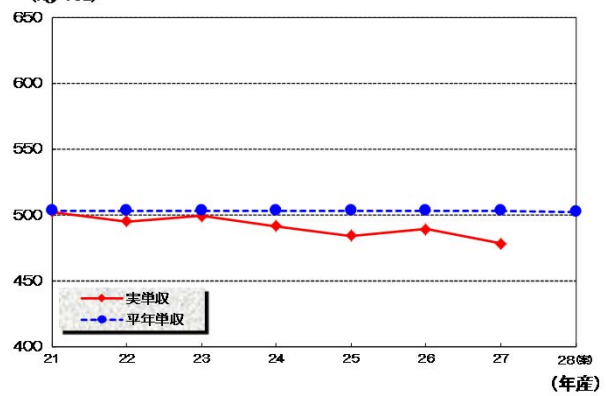
近年の10a当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作最況終指数)
21	×	○	×	100
22	××	○	×	98
23	○	××	×	99
24	×	○	×	98
25	—	××	×	96
26	—	×	×	97
27	×	×	×	95

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み  
 ×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(大分は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



大分	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
実単収	502	495	499	491	484	489	478	
平年単収	503	503	503	503	503	503	503	502
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-1
作況指数	100	98	99	98	96	97	95	

資料：「作物統計」

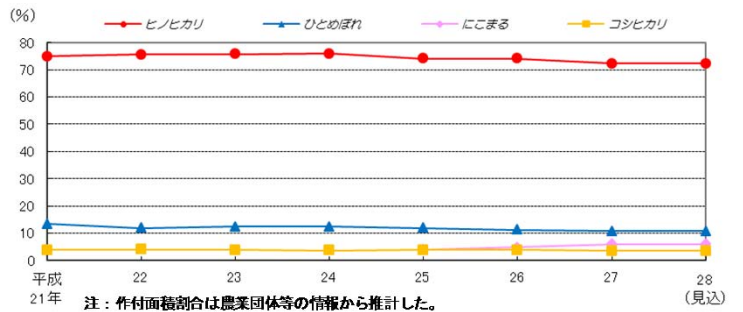
表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
大分	503	492	△11	488	488

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種である「にこまる」及び「つや姫」への作付誘導が進められているものの、「ヒノヒカリ」の消費者からの人気は根強く、品種別作付面積割合は、大きな変動はみられない。(図2)

図2 品種別作付面積割合の動向



### 3 作柄表示地帯別作付面積の動向

作柄表示地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の高い北部地帯の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い日田地帯の作付面積割合が増加傾向にある。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
北部	508	30.0	30.2	30.2	29.9	28.9	28.6
湾岸	488	29.3	29.0	29.0	29.0	29.2	29.3
南部	484	28.8	28.9	29.0	29.0	29.4	29.5
日田	478	11.9	11.9	11.8	12.1	12.5	12.6
10 a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.0	0.0	△ 0.1	△ 0.3	△ 0.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5年平均である。

2 作付面積割合は農業者等の情報から推計した。

### 4 栽培技術面の動向

栽培技術面の動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴い1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。

(図3及び4)

図3 1㎡当たり株数の推移

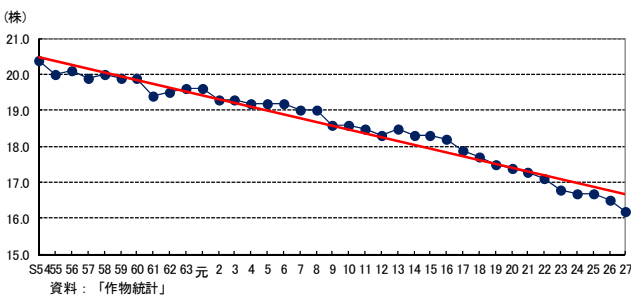
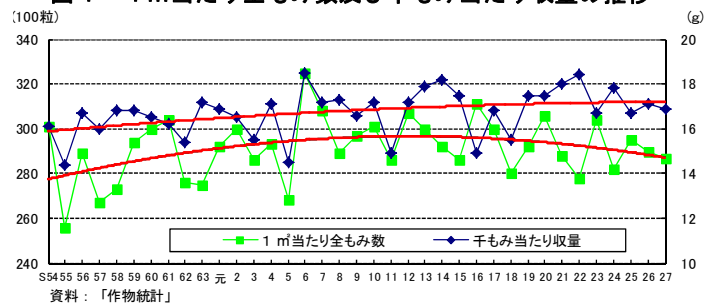


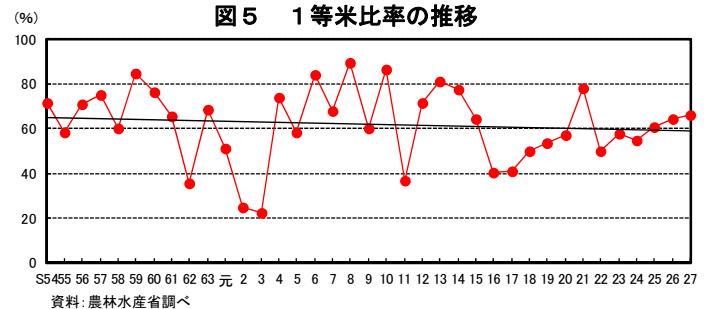
図4 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、わずかながら低下傾向にある。（図5）

図5 1等米比率の推移



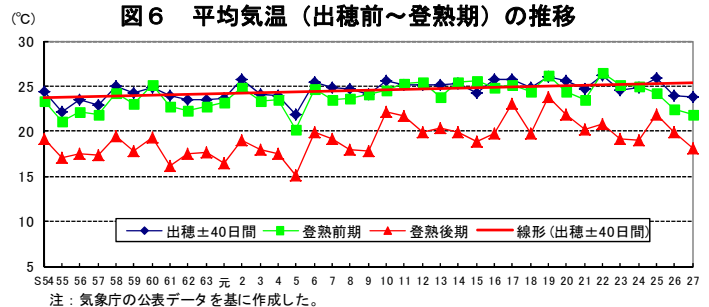
### 6 収量水準の動向

①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、

②作柄表示地帯別割合をみると、比較的収量水準の高い北部地帯の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い日田地帯の作付面積割合が増加傾向にあること、

③省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあること、から、収量水準は下降傾向にある。

図6 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



# 宮崎

## 1 近年の10a当たり収量の動向

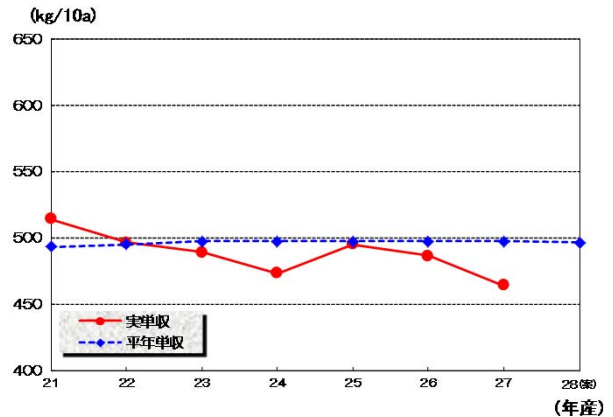
近年の10a当たり収量の動向をみると、低めで推移し、下降傾向にある。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄（平成21年産以降）

年次		全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	早期	◎	—	◎	109
	普通期	×	◎	—	101
22	早期	×	○	—	100
	普通期	×	◎	—	100
23	早期	××	◎	×	96
	普通期	—	—	—	100
24	早期	××	◎	×	98
	普通期	××	—	××	93
25	早期	×	—	—	99
	普通期	○	××	—	100
26	早期	—	—	—	102
	普通期	×	—	××	95
27	早期	××	××	××	85
	普通期	—	×	×	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮崎は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



宮崎	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
実単収	514	496	489	473	495	486	464	
平年単収	493	495	497	497	497	497	497	496
前年差	0	2	2	0	0	0	0	-1
作況指数	104	100	98	95	100	98	93	

資料：「作物統計」

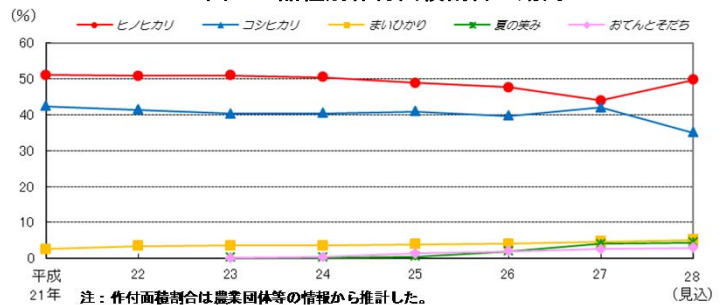
表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
宮崎	497	488	△9	483	481

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種で高収量の「おてんとそだち」及び「夏の笑み」への作付誘導が進められており、「コシヒカリ」の作付面積割合が減少傾向であるものの、消費者の人气が根強い「ヒノヒカリ」の作付面積割合に大きな変動はみられないことから、総体的には品種別作付面積の変動が収量水準に与える影響は少ない。(図2)

図2 品種別作付面積割合の動向



注：作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

## 3 収量水準地帯別作付面積の動向

収量水準地帯別作付面積の動向をみると、わずかであるが低収量地帯（早期栽培）の作付面積割合が減少傾向であり、中収量地帯（早期栽培及び普通期栽培）の作付面積割合が増加傾向であるものの、収量水準への影響はほとんどみられない。(表3)

表3 収量水準地帯別作付面積の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
高収量地帯（普通）	524	25.6	25.6	25.3	25.8	26.0	25.6
中収量地帯（普通）	482	32.8	32.8	32.4	32.1	33.0	33.2
中収量地帯（早期）	483	16.6	16.6	17.3	17.1	16.5	16.8
低収量地帯（早期）	471	25.0	25.0	25.0	24.9	24.5	24.3
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.0	△0.1	0.2	0.1	△0.1

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

#### 4 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化の観点から、緩効性肥料（基肥一発肥料）の使用状況が安定するとともに、疎植栽培が進み、1㎡当たり株数は減少傾向にあり、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。（図3、4及び5）

図4 1㎡当たり株数の推移

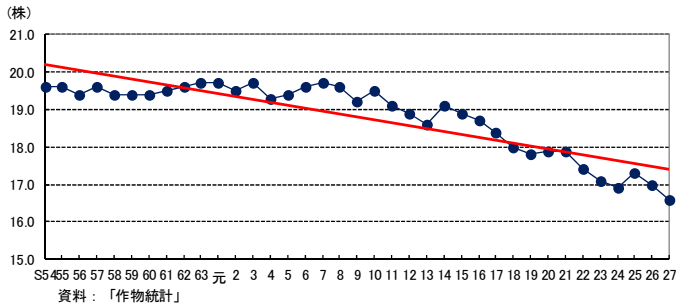


図3 緩効性肥料の使用割合の動向

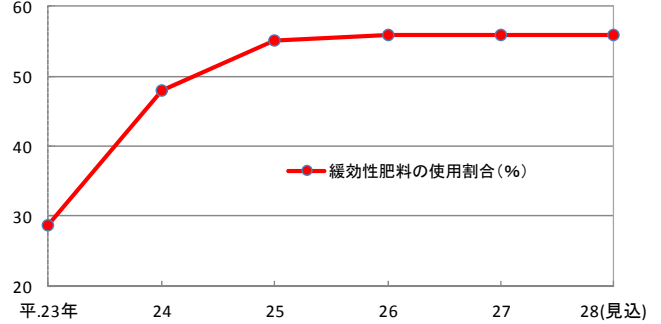
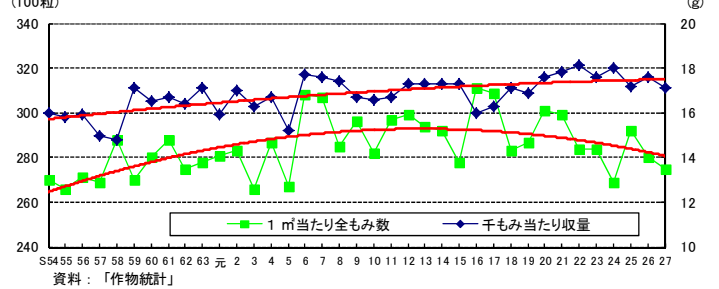


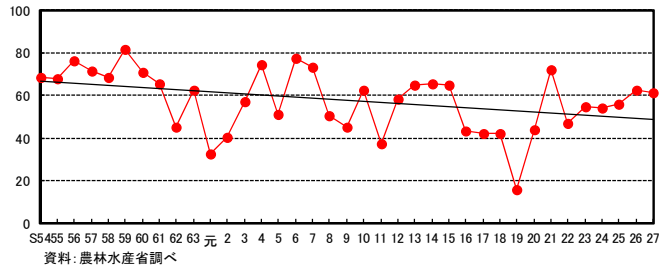
図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



#### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。（図6）

図6 1等米比率の推移



#### 6 収量水準の動向

①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、  
②省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移（早期）

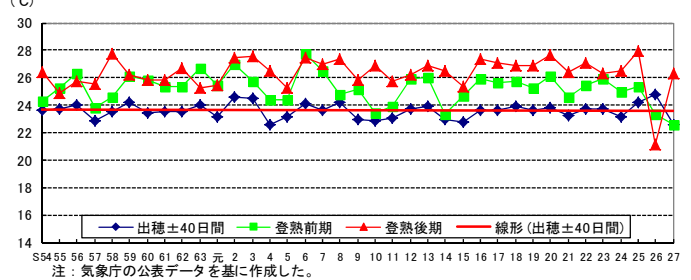
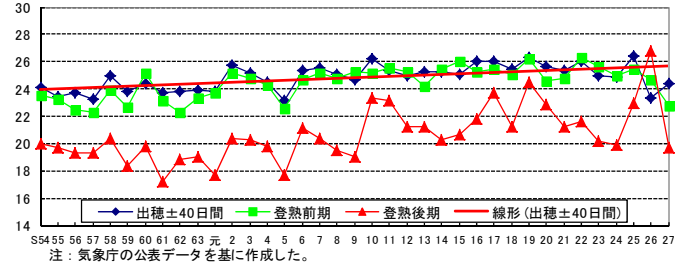


図8 平均気温（出穂前～登熟期）の推移（普通期）



## 鹿児島

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

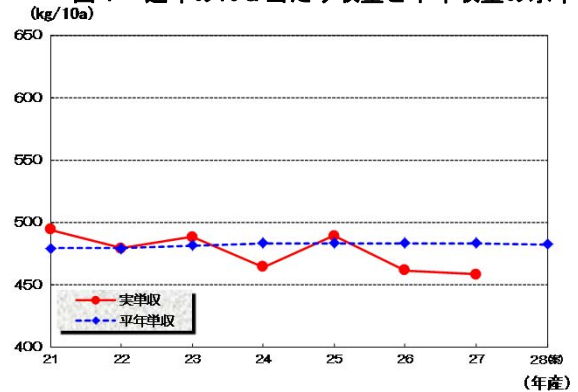
近年の10a 当たり収量の動向をみると、収量は低めで推移し、下降傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次		全もみ数	登熟	被害	(作最況終指数)数
21	早期	—	◎	◎	106
	普通期	×	◎	○	102
22	早期	×	○	×	98
	普通期	×	◎	—	100
23	早期	×	◎	×	97
	普通期	×	◎	○	103
24	早期	×	○	×	96
	普通期	×	—	×	96
25	早期	×	◎	○	104
	普通期	—	—	—	100
26	早期	—	○	○	103
	普通期	×	○	×	94
27	早期	×	×	×	88
	普通期	×	○	×	96

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（鹿児島は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



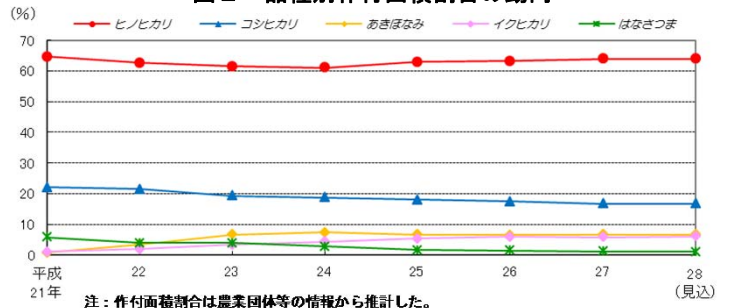
鹿児島	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
実単収	494	479	488	464	489	461	458	
平年単収	479	479	481	483	483	483	483	482
前年差	0	0	2	2	0	0	0	-1
作況指数	103	100	101	96	101	95	95	

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
鹿児島	483	476	△7	471	472

図2 品種別作付面積割合の動向



注：作付面積割合は農家団体等の情報から推計した。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高品質・高収量の「イクヒカリ」への作付誘導が進められており、「コシヒカリ」の作付面積割合が減少傾向にあるものの、消費者の人气が根強い「ヒノヒカリ」の作付面積割合の大幅な変動がみられないことから、品種別作付面積割合が収量水準に与える影響は、ほとんどみられない。(図2)

### 3 収量水準地帯別作付面積の動向

比較的収量水準の高い地域の作付面積割合が減少傾向にある。(表2)

このうち、収量水準の高い伊佐始良地帯では、近年、良質米生産のため、化学肥料及び農薬の使用を抑えた伊佐ブランド米の生産を進めており、量から質への転換により収量水準は低下傾向にある。(図3)

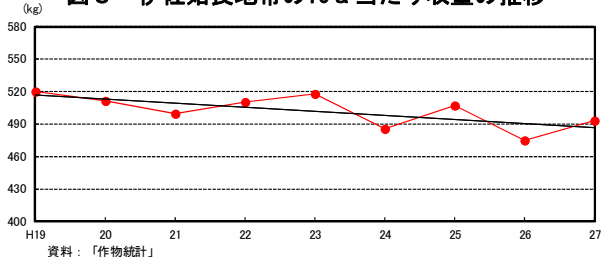
表2 収量水準地帯別作付面積の動向

地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
高収量地帯	495	53.3	53.1	53.1	52.9	53.1	52.6
中収量地帯	461	42.2	42.5	42.4	42.6	42.5	42.9
低収量地帯	413	4.5	4.4	4.5	4.5	4.4	4.5
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)				0.0	△0.1	0.1	△0.2

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農家団体等の情報から推計した。  
 3 高収量地域は出水産地帯及び伊佐始良地帯、中収量地帯は薩摩半島地帯及び大隅半島地帯、低収量地域は熊毛大島地帯をいう。

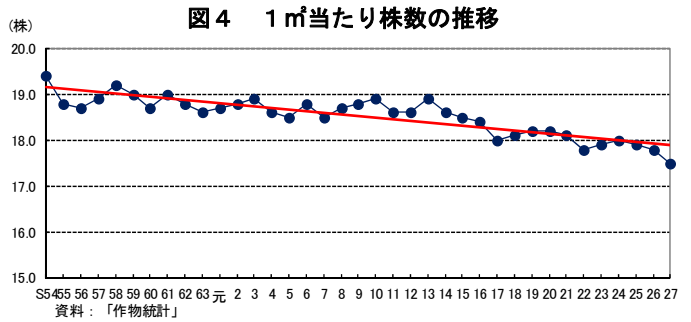
図3 伊佐始良地帯の10a 当たり収量の推移



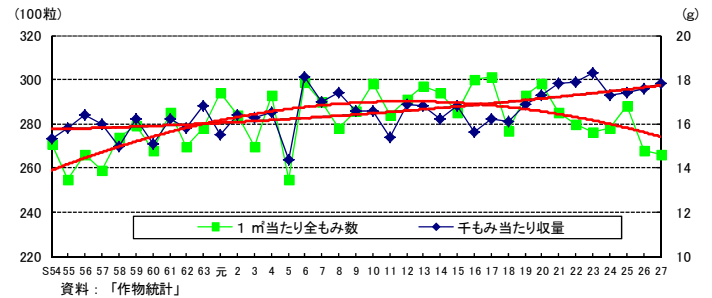
資料：「作物統計」

#### 4 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が進み、これに伴い、1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。(図4及び5)

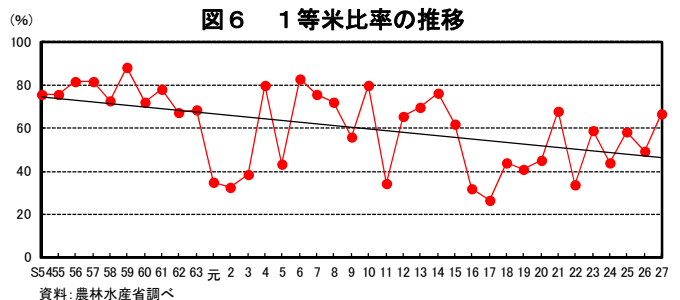


**図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移**



#### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図6)



#### 6 収量水準の動向

①近年の10a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、  
②作柄表示地帯別割合をみると、比較的収量水準の高い地帯の作付面積割合が減少傾向であり、このうち、県内一の生産量の伊佐地区で、良質米向上を目指した「伊佐ブランド米」の推進に伴い、収量水準は減収傾向にあること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

**図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移**

